東洋大学工業研究所 客員研究員

障害者向けの環境づくりは誰にとっても使いやすい環境につながる

高橋儀平

障害を持つ人のための建築計画、生活空間計画、バリアフリー、ユニバーサルデザインについて40年間研究を重ねてきた高橋儀平さん。その姿勢は常に当事者に寄り添うものだった。3月まで在籍していた東洋大学ライフデザイン学部の研究室を訪ねてお話を聞いた。

取材・文●鈴木伸子　撮影●坂上俊彦（東京フォトアーガス）　写真提供●高橋儀平

地域の中で暮らしたいという願い

障害者の住まいづくりや地域活動の専門家である高橋儀平さんは、この分野の先駆者的存在だ。その目指すところは、すべての人に公平で魅力ある建築物や生活空間の実現に向けて、建築計画を立てることである。

高橋さんが障害者の生活空間についての調査、活動を始めたのは東洋大学の建築学科を卒業し、研究室に助手として在籍していた25歳のとき、1974年（昭和49）のことだった。

「埼玉県川口市で脳性まひの人たちが自分たちの居住空間について市に要望を出している。ついては、その建物の図面を作るなどの支援をしてあげてほしいと、建築学科の同僚に頼まれたのです」と、当時を語る。

川口駅前の喫茶店で会った八木下浩一さんは当時32歳。脳性まひで、なんとか自立歩行できるような状況だった。

脳性まひとは、周産期前後に酸欠状態などによる脳の損傷によって起こる運動機能障害。損傷を受ける場所によって症状はさまざまだ。日常生活に介助が必要となることも多く、障害者施設に入る人も少なくなかった。

この頃、日本では障害者の大規模な収容施設を人里離れたところに造り始めているような状況だった。八木下さんは、そのような場所ではなく町の中に、家族・友人にもすぐに会えるような場所に少人数で住みたいという希望を持っていた。今でいうグループホーム的なものと考えてよいだろう。

当時は珍しかった「行動する障害者」であった八木下さんは、市内の脳性まひ患者たちのもとを一人ひとり訪ね、賛同者を集めていった。高橋さんは障害者福祉についての知識はまったくなかったが、学生時代から社会問題に目を向けていたこともあって協力の意志を固め、同時に「自分はこういう仕事に一生関わっていくかもしれない」となんとなく直感したという。

八木下さんと5～6人の賛同者、そして高橋さんたちが川口市に要望書を出したのが74年。「川口に『障害者』の生きる場をつくる会」として、市役所の福祉部、市議会議員、市長、厚生省などと地道に交渉を続け、紆余曲折を経て、目指していた施設は78年についに完成した。

1978年に埼玉県川口市にできた「しらゆりの家」。2016年3月、事業変更のために完全閉鎖された。

スウェーデンの先進的な福祉に学んで

その活動の途中、施設が完成する2年前に、高橋さんたちは福祉先進国である北欧のスウェーデンで、既存の障害者施設を解体して、地域の中で障害者と健常者が共生していく政策を実現しているという情報を得る。これはまさに自分たちが川口でやろうとしていい

Gihei Takahashi
1972年東洋大学工学部建築学科卒業、2019年3月まで
東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科教授。
東京都福祉のまちづくり推進協議会会長、
新国立競技場ユニバーサルデザインアドバイザー、
東京2020大会都立競技施設のアクセシビリティ・ワーキング副委員長、
内閣官房ユニバーサルデザイン2020行動計画作業グループ参与、
国土交通省バリアフリー法建築設計標準改正検討会座長など。

長年教鞭をとった東洋大学朝霞キャンパスにあるライフデザイン学部の研究室にて。

2012年に行ったTOTOとのトイレ開発の共同研究から。学生が参加してモックアップ検証を行った。